

小峰城よもやま話

第十八話
二之丸の
昔と今

二之丸は本丸の南側に隣接する郭で、現在の芝生広場の範囲がおおむね相当します(下写真)。現在は市民の憩いの場となっていますが、江戸時代はどんな様子だったのでしょうか。

小峰城において、二之丸は本丸と三之丸を中継する要の位置にあります。東は藤門、西は元太鼓門、南は太鼓門、北は清水門と、四方に門が置かれ、周りは堀で囲まれています。

松平定信時代の「奥州白河城下全図」(下図)などによれば、二之丸には御城米蔵や大庭蔵などの蔵や、藩の用務のための建物がありました。

御城米蔵は「御用蔵」とも言われ、城に備蓄される米などの保管場所であったと考えられます。このように、二之丸は城内でも多くの蔵が立ち並ぶ場所であり、藩の物資を保管する重要な場所であったと考えられます。なお、当時の二之丸の様子を、現地にてARでご覧いただけます。ぜひご利用ください。

※ARのご利用は、現地案内板に従いスマートフォンアプリのダウンロードが必要です。



現在の二之丸跡



江戸時代の小峰城二之丸周辺 (奥州白河城下全図)より
文化財課 ☎2310

渋沢栄一×松平定信 南湖を彩る系譜

第九回
渋沢栄一と養育院
(その二)

渋沢はさまざまな活動で忙しさを極めても、定信の月命日の毎月13日には必ず養育院に登院して業務をこなし、入院者と交流しています。

養育院を運営する中で、渋沢は2人の福島県人を採用していました。一人は安達憲忠という元自由民権活動家で、渋沢は安達を厚く信頼し養育院の事務を任せています。もう一人は、喜多方の慈善事業家であった瓜生岩子です。渋沢は瓜生を養育院の幼童世話係長に就け、幼児教育に励んでもらっています。

東京府が養育院の廃止を決定し、経費の支給を停止した時には、渋沢は私財を投じるとともに財界から寄付を募り、自ら養育院の経営を行いました。院内に感化部を設置して不良少年の矯正指導をしたり、作業場を設けて入院者の自立を図ろうとしたりしています。

渋沢の尽力により、養育院はその後大きく発展を遂げていきます。昭和61年に東京都老人医療センターと改称。平成11年には東京都養育院条例廃止により、養育院の名称は消滅しますが、平成21年に老人医療センターと老人総合研究所が一体化され、現在の東京都健康長寿医療センターとなりました。

渋沢は経済活動にまい進する一方、資本主義が発展すればするほど経済的格差が拡大するとの認識を持っていました。しかし、経済的弱者を切り捨てるのではなく、社会制度を整備してすべての人を救済すべきであるという考えを貫きました。

喜寿を迎えた際に渋沢は、企業や財界の役職をほとんど退きました。養育院の院長だけは死ぬまで続けました。渋沢の人生は、まさに福祉に捧げた一生でもあったと言えるのではないのでしょうか。



(文・中山義秀記念文学館 館長 植村美洋)



▲東京都健康長寿医療センター
◀「渋沢栄一銅像除幕式 板橋本院玄関前」(渋沢史料館所蔵)

お知らせ
ラウンジ
りげらん
シリーズ
子育て
保健
くらしの
情報館
手話
高齢者サロン
休日当番医・
無料相談ほか
市長の
手控え帖